

21世紀の日本のかたち（110）

2018(平成30)年の夏 死と生 戦争と平和



戸沼幸市

<(一財)日本開発構想研究所 代表理事>

1. 猛暑（酷暑）の夏

平成年代最後となる今年の夏は、7、8月とも連日、人間の平均体温を超える猛暑（酷暑）続きでした。気温35℃でも舗装されている都市の地面では40℃を超えてサウナのようにです。観測史上最高の41.1℃（7月23日、埼玉県熊谷市）を記録した日もありました。

猛暑の影響は高齢者に厳しく、熱中症による死者も出るほどでした。猛暑の影響は人間の健康や生命だけではなく、農水産分野、経済活動にも広く及びました。

今夏の猛暑は日本だけではなく、世界各地に広がっており、乾燥による火災などが報告されております。これらは地球温暖化の影響によるものなのでしょうか。

2. 西日本豪雨

今夏、7月6日に発生した平成30年7月豪雨（西日本豪雨）は、降水量が日本の観測史上最多とか、日本列島の西側地域、特に広島県や岡山県に大きな災害をもたらしました。

西日本豪雨に関する第一報は、7月6日、大雨により広島で1人死亡、土砂災害、氾濫、警戒呼びかけといったものでした。その後の一週間、被災地域が西日本一帯に広がり、1日刻みで死者不明者が一桁を超えて増加し、7

月10日には死者126人、不明76人と、平成年代における最悪の状態になりました。豪雨1週間後の7月13日、家屋被害3万棟を超え、死者204人、不明62人、孤立している人々2,000人と報じられました。犠牲者の7割が60代以上の方々でした。在来線は寸断され、物流の大動脈は不通となり、代行輸送にも限界があり、これが地域の生活を直撃しました。

戦後70年余、日本列島の高度経済成長に合わせて造られたハードなインフラが、方々で耐用年数が来ており、安全に対して万全でないことが今度の西日本災害でも明らかになりました。と同時に、日本社会の共生のインフラも大きく変化していることに気づかされます。社会構造の基礎単位である家族が、大家族から核家族、そして素粒子（1人）家族、特に超高齢社会での老人の一人暮らしが増加しております。また、地方の市町村の多くが、多死社会、人口減少場面にあります。これを支える社会インフラをどのように再構築するかが、日本の21世紀の課題に違いありません。

これに対して現在進行している技術文明—AI、SNSなど、マン・マシンの結合と進展は、我々の社会をどのように作り上げるのか不透明です。日本社会の精神的支柱、基盤をどのように再認識するのか。

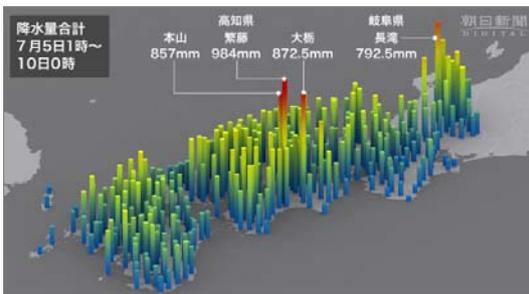
目指すべき持続可能な共生社会—死と生を含む生命の網の目社会を、網の目のほころび、欠落を補いつつ再構築する場面にあると考えます。

今回の記録的豪雨は、河川堤防、砂防ダムにダメージを与え、激流となって山沿いにある宅地を襲い、自宅で7割の方々が死亡、特に自力で脱出困難な高齢者が二階で死亡したと伝えられております。

豪雨発生からほぼ一ヶ月（8月1日）の主な被害は次のように報告されました。

死者 225 人、重症 68 人、軽傷 366 人、床上・床下浸水 34,869 棟、断水世帯 最大 263,308 戸、鉄道の運転休止 最大 115 路線（8月1日現在、関係省庁のまとめによる）

図1 気象データでみる西日本豪雨



資料：朝日新聞デジタル版

今度の被災はもともと居住条件の悪い「災害避難地域」に集中しています。8月初旬、被災から1ヶ月経ち、ようやく復旧から生活再建、インフラ再建へと復興への動き、地元自治体や国による支援活動にボランティアの人たちの参加も始まりました。

西日本豪雨災害について、「コミュニティ力」が話題となっております。日頃の安全確認、近隣での世話役の活動によって、被害を最小限に食い止めた事例も報告されています。自助、共助、公助のうち、共助の活動が光ります。災害時の予知・避難、情報網の整備な

ど、災害国日本の防災のあり方までが、地域においても国家としても抜本的に議論することが求められています。9月の自民党総裁選において、「防災省」の新設を石破茂氏は提案していますが、一考を要する話題です。平成年代、阪神・淡路大地震、東日本大地震、そして今回の西日本豪雨災害と続き、近未来、首都直下、南海トラフ大地震が想定されているのです。

3. オウム死刑執行

この7月6日、26日と、麻原彰晃こと松本智津夫（63歳）はじめ、オウム真理教元幹部13人の死刑が執行されました。日本においてこれほどの多数の死刑が一時になされたことは、先の戦犯の死刑執行を除けば類例のないことです。改めて教祖、麻原彰晃のつくり上げたオウム真理教集団が引き起こした、一連の特異な事件が思い出されます。

坂本弁護士一家殺害事件（1989・平成元）、松本サリン事件（1994・平成6）、そして13人を死亡させ、多数の人を負傷させた、東京・日比谷線の地下鉄サリン事件（1995・平成7）は、平成年代の幕開けのディストピア（地獄絵）的出来事でした。そして、平成年代の最後の年、平成の幕引きのように、オウム13人の死刑が執行されました。

オウム真理教事件とは何であったのか、戦後日本の20世紀後半は、戦災復興から経済成長へ、この間、農村から都市、特に東京など大都市への人口移動、都市における物的豊かさ、人々のマイホームの夢の実現へと向かいました。この間、大学では、60年代、70年代と安保反対、大学改革などを掲げた学園紛争がありました。

そして80年代、オウム真理教を名乗る特異な宗教集団が現れて、社会を震撼させる事件を起こしましたが、この教団幹部はほとんどが理系の大学・大学院修了の若者たちでした。化学兵器を製造し、これを都心で使いました。平成年代、物質的豊かさの中で消費が煽られ、精神的に空洞化する社会に、真理を説くカルト、新興宗教に吸い寄せられるように多くの若者が信者になってゆきました。

信者は情動的に外部と遮断され囲い込まれ、教団は擬似国家的体裁を作って、反社会的行動に突き進んだ経過は、「IS」の動きに似ていなくもありません。

ともあれ、今夏の7月のオウム真理教の幹部13人の死刑が執行され、平成の幕引きとなりました。

しかし平成を引き継ぐ少子高齢、多死の日本の社会では様々な課題が山積しております。三世代共存の家族が二世代となり、一人世帯の増加、スマホ、SNS、AIなど、情報環境の激変の中での人肌な人間関係の希薄化、近所・近隣に重なっていた伝統的地域社会の変容、都市の無宗教化、生と死を柔らかく継ぐべき伝統的宗教の衰退、近未来の日本社会の底流には、オウム的なもののマグマがないとは言えないのではないかと懸念が残ります。

4. 翁長雄志沖縄県知事急逝と沖縄ビジョン

「民意を顧みず工事が進められている辺野古新基地建設については、沖縄の基地負担軽減に逆行しているばかりではなく、アジアの緊張緩和の流れにも逆行している」これは沖縄戦の犠牲者等を悼む慰霊の日（6月23日）に翁長沖縄県知事の読み上げた平和宣言です。

翁長知事は本土にとって「沖縄とは何か」

を日本の国民に問い続け、米軍普天間飛行場の辺野古移設反対を主導してきましたが、病の進行する中、国家を相手に身命を賭しての戦いでした。

沖縄21世紀ビジョン

沖縄は日本列島が入る3,000kmで円を画けば、南はフィリピン、インドネシア、西はラオス、ベトナム、朝鮮半島、中国がすっぽりと入ります。いわば北東アジアの要の位置にあります。本土面積の0.6%のこの沖縄に、米軍専用基地の70%があります。これは何といても不条理なことです。沖縄県は21世紀ビジョンとして、第一に大規模な基地の返還と、それに伴う県の再編を挙げています。

図2 沖縄から日本列島が入る
ほぼ3,000kmの領域



資料: 理事長の部屋「21世紀の日本のかたち(57)」
2012.10.22、戸沼幸市、日本開発構想研究所

朝鮮半島の非核化、南北朝鮮の融合といった政治的、軍事的情勢の変化の中で、沖縄の米軍施設の縮小・移転は、本土における負担のあり方を含めて、抜本的に考えるべしです。

翁長雄志沖縄県知事の死は、これに対する問題提起の壮絶な闘いと受け取れます。全国知事会も沖縄の願いを共有すべきではないか。

訃報

東京大学名誉教授、稲本洋之助さん(82歳)

が死去されました。稲本さんは「土地法」の大家として、法学の立場から、日本の都市計画・国土計画に示唆に富む発言を続けてこられました。稲本さんは私ども日本開発構想研究所の評議員を、平成2年から今年、平成30年6月まで務められ、評議員会議長として研究所の運営に指針を与え、指導してくれました。この夏の研究所の評議員会に出席予定でしたが、突然の訃報に驚きました。ご冥福を祈ります。

図3 平成27年10月定期借地権の日
記念大会での稲本先生



資料:NPO 法人首都圏定期借地借家権推進機構

5. 原爆忌：広島（8.6）・長崎（8.9）

原子爆弾の被爆73年となる平成最後の夏、広島と長崎で平和記念式典が行われました。

広島平和宣言

広島の様式には被爆者遺族、安倍首相、85カ国の駐日大使ら5万人が参加しました。原爆投下の午前8時15分に黙祷を捧げ、松井一實広島市長は平和宣言として「原爆犠牲者の御霊に衷心より哀悼の誠を捧げ、被爆地長崎、そして世界の人々と共に、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて力を尽くすことを誓い」核兵器禁止条約を核兵器のない世界への一里塚とするための取り組みをと、各国の政

治リーダーたちに求めました。

私も8月一日（世界で最初に原子爆弾が落とされた）広島平和公園を訪ね、慰霊碑に手を合わせました。慰霊碑の向こうに原爆ドームが見えておりました。公園内の原爆資料館には外国人も交えて大勢の見学者が、73年前の惨状を写す写真や資料に見入っておりました。被爆の全体像、個々後遺症に悩む人々の被曝の詳細、人と都市を破壊する原爆の非人間性、風化させてはならない出来事として見学者に迫ります。広島と長崎の原爆の記憶を継承しつつ、人権、環境と重ねて被爆者とともに未来に生きる世代、子や孫たちにつなげることに、私たち戦争を知る世代の役目であることを自覚させられます。

写真1 広島平和記念公園



(戸沼撮影 2018.8.18)

写真2 原爆の子の像



(戸沼撮影 2018.8.18)

長崎市長平和宣言

今年の夏、8月6日の広島に続いて、例年通り長崎市の市民公園で平和記念式典が行われました。

式典には被爆された方々、ご遺族、市民が参列し、核保有国を含む71か国の駐日大使、グテーレス国連事務総長、安倍首相ほか、政府要人が参加し、かの原爆投下の午前11時2分に合わせて、1分間の黙祷が行われました。

昨年12月には核兵器廃絶国際キャンペーン（I CAN）がノーベル平和賞を受賞、また国連において核兵器禁止条約が採択されております。

現在、地球上には約15,000発（Arms Control Association 軍備管理協会 2018.7 発表）の核兵器が、米露ほか、いくつもの国で保有されており、今年は終末時計が何時、午前0時になってもおかしくない状態もありました。長崎市の田上富久市長は被爆地の原点から「地球上の多くの人々が核兵器のない世界の実現を求め続けている。・・・唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約に賛同し、世界を非核化に導く道義的責任を果たすことを求める」と政府に迫りました。米国の核の傘に入っている日本の安倍首相として、この問いにどのように答えるのか。広島、長崎の原爆被害者は高齢になりましたが、後遺症のこと、原爆投下の都市の惨状について様々に話しておられますが、この体験を語り継ぐ若い世代の動きが報じられていることは頼もしいことです。

長崎の鐘 永井隆

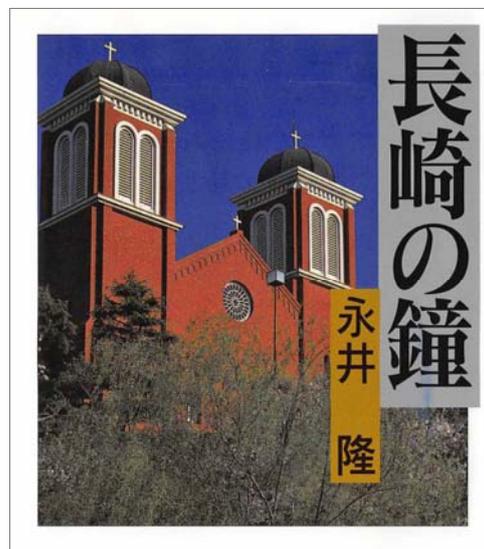
「天主堂から原子野に鳴り渡る長崎の鐘—
世界に向けて平和の響きを伝えるかのように。

人類よ、戦争を計画してくれるな。原子爆

弾というものが存在する以上、戦争は人類の自殺行為にしかならないのだ。戦争をやめてただ愛の掟に従って相互に助け合い、平和に生きてくれ。」

終戦当時、12歳であった私として、長崎原爆の日になると、ある時に読んだ永井隆博士の著作「長崎の鐘—この子を残して」を思い出します。大浦天主堂はこの度、ユネスコ世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の一つに選ばれております。

図4 『長崎の鐘』表紙



資料：『長崎の鐘』永井隆 著、日比谷出版社、1949

6. 平成最後の終戦記念日 (8.15)

この夏8月15日は、戦後73回目の終戦の日に当たり、天皇陛下ご出席のもと、恒例の政府主催の全国戦没者追悼式が日本武道館で行われました。全国から約6,500人を超す遺族の方々が参列し、正午に黙祷。

「戦争の惨禍が再び繰り返されぬことを切に願ひ、全国民とともに、戦陣に散り、戦禍に倒れた人々に追悼の意を表し、世界平和とわが国の発展を祈ります」とは、平成の象徴天皇最後のお言葉でした。

図5 全国戦没者追悼式で
「おことば」を述べる天皇陛下と皇后陛下



資料：朝日新聞デジタル版

私もこの追悼式の様子をテレビで見つつ、改めて、国家が戦争のための装置となった時代を思い返したことでした。20世紀前半に日本が起こした戦争は、いかにも無知無謀なものでした。なにしろ日本人310万人が戦死した太平洋戦争の範囲は、北東アジア全域に及んでいるのです。北は樺太、千島、アリューシャン、南は中部太平洋、フィリピン、ボルネオ、パプアニューギニア、ビスマルク・ソロモン諸島、インドネシア、インド、ミャンマー、タイ、マレーシア、西に中国本土、朝鮮半島、旧満州、モンゴルと、小さな島国日本と、まるで地理・地形、気候条件の異なる北東アジアの地図がいっぱい広がっているのです。

この広大な地域で戦死した310万人といわ

れる若い命についてもさることながら、現地において住民などへも非道な残虐を引き起こしているのです。これについて、最近数々の記録と証言が発掘されております。日本の加害責任について、歴代内閣は「深い反省と哀悼の意」を表明してきましたが、今回はこれについて言及がありませんでした。

今年、2018（平成30）年8月15日も暑い夏でした。私も午後、千鳥ヶ淵戦没者墓苑と靖国神社に参って手を合わせました。皇居のお堀端の千鳥ヶ淵墓苑は、参詣者はあまり多くはありませんでしたが、靖国神社は日本武道館での追悼式を終えた遺族の方々など、大勢の参詣者で一杯でした。天皇陛下はA級戦犯合祀の靖国神社への参拝はされておられません。

国立の追悼施設を

日本政府主催の全国戦没者追悼式典は、もともとスポーツ施設である日本武道館に、この日だけ標柱を建て仮の追悼式を続けてきました。何か年中行事の一つとしての済ませ事のようにも感じられます。より広く一般の人々、外国人もお詣りできる国立の追悼施設をつくるべしと、私なりのイメージを「国立追悼空間-平成の森づくり」を先に「21世紀の日本のかたち」第70回、2014.1.15に記しました。これについて元早稲田大学総長、西原春夫先生からお手紙をいただきました。

西原先生は「追悼・平和祈念のための記念碑等施設の在り方を考える懇談会-福田康夫官房長官の私的諮問機関」の起草委員長を務めておられたのです。（平成14年12月24日報告書提出）

私の考えでは戦争資料館を常設した国立追

悼施設を、平和な平成年代を記念する「平成の森づくり」に合わせて造るべしというものでした（「21世紀の日本のかたち」第15回、2009.3.15）。

「戦後79年もたち、わだかまりなく追悼し、平和を祈念できる施設がないのはおかしい。天皇陛下もおいでになれる、全国追悼式も挙行できる、外国の賓客も訪れることのできる、そういう施設を造りましょうよ。」とは、福田康夫元首相の、この夏8月15日の平和日本の祈りのかたちへの発言でした。（読売新聞、2018.8.15）

昭和と平成年代を包んで、新しい発想で戦争で亡くなった方々を悼み、平和を願う国立追悼空間を平成の森づくりに合わせて造ってほしいものです。

7. 生の躍動 2018 スポーツの夏

スポーツの栄えは平和の証です。今年の夏は100回目となる全国高等学校野球選手権大会（夏の甲子園高校野球）や、W杯サッカー・ロシア大会、ジャカルタ・アジア大会などが行われました。日本の若い人たちの活躍ぶりが溢れるスポーツの発展の生の跳躍は、スポーツ好きの私には暑い夏の楽しいテレビ観戦でした。

W杯サッカー、第21回ロシア大会

4年に一度の世界のサッカーの祭典（ワールド・カップ）が、6月14日午後6時（日本時間15日午前0時）、モスクワ会場で開幕し、世界中のサッカーファンが見守る中、7月15日まで世界の強豪たちの熱戦が繰り広げられました。

この中に西野朗監督率いる日本チームも入

っており、真夜中のTV観戦に一喜一憂したことでした。日本チームは予選を勝ち抜き16強入りを果たし、強豪ベルギーとの対戦では8強入りまであと一步のところまで追い詰めました。日本は前半を0対0でしのぎ、後半に入って早々に2点を先取して、このまま逃げ切るかと身を乗り出しましたが、終了間際、波のように押し寄せるベルギーの速攻に追いつかれ、3点を入れられて8強入りはあと一步で叶いませんでした。決勝戦は、ヨーロッパの大国フランスと、東欧の小国クロアチアとの対戦となりましたが、4対2でフランスの優勝となりました。フランスチームはアフリカ系も入った混成チームの勝利でしたが、21世紀初頭の国々、国家の表情が如実に表れていたW杯サッカー・ロシア大会でした

図6 ベルギーに敗れ8強入りを逃し、スタンドのサポーターに挨拶する日本の選手達



資料：朝日新聞デジタル版

100回目の夏の甲子園高校野球

今年も猛暑続きの日本の夏、8月5日から夏の甲子園高校野球が、若い肉体の跳ねるような熱戦が8月21日の決勝戦まで繰り広げられました。今年も100回目であり、第1回は1915（大正4）年に始まったのが、戦争で中断され、第二次世界大戦での日本の敗戦後、1946年8月15日に再スタートされました。

今年の第100回甲子園高校野球記念大会では、なんとといっても秋田県立金足農業高校の鮮やかな戦いぶりが印象に残ります。1回戦鹿児島実業、2回戦大垣日大を破ったあたり

から俄然注目を集め出しました。雪国秋田県の公立の農業高校という点で、参加した他の私学系、大学附属系の出場校の中で際立っていたことも改めて気付かされました。そして勝利の後に歌う校歌を、胸を突き出してのけぞるように歌う雑草軍団のスタイルにも度肝を抜かれました。金足農の連投を続けた吉田輝星投手、それを支える選手が一丸となって支える姿には、まさに東北の雑草の強さが感じられたことでした。3回戦横浜高、4回戦近江高、5回戦日大三高と、最終回で鮮やかに逆転する戦いぶりはまさにドラマでした。忘れかけている「農」「農業」との繋がりを改めて思い出させてくれました。

図7 決勝進出を決め、スタンドの応援団へあいさつに向かう金足農の選手たち



資料：朝日新聞デジタル版

そして夏の甲子園大会の頂点、大阪桐蔭との決勝戦の頃には、秋田、東北、全国の農業者がこぞって金足農を応援したのではないかと思います。結果は春夏連覇となる大阪桐蔭に13対2で敗れましたが、金足農は大健闘でした。この夏100回目となる甲子園高校野球は、戦後73年の年であり、平和あってこそこのことであり、101回へこの21世紀も10年、20年と脈々と続いて欲しいものです。

ジャカルタ・アジア大会

この夏はまた、8月18日からアジアのオリンピックともいわれるスポーツの祭典が、45カ国・地域から若い男女が集まってインドネ

シア・ジャカルタで繰り上げられました。まさに大会のテーマ「アジアの活力」を表すように、若い人々の「生」の躍動が繰り上げられた大会でした。

2年後に迫った2020東京オリンピック・パラリンピックもあり、日本選手も大活躍でした。かつての太平洋戦争の地におけるスポーツの隆盛も、平和な時代だからこそのことと、この8月に特に思うのです。

参考

地理	赤道を中心に広がる、15,000近い島からなる世界最大の群島国家
人口	2017年 2億6,200万人 2050年予測、約3億人。人口増加率1.04%、15歳以上人口約3割 中国、インド、アメリカに次ぎ世界第4位
民族	約300の民族、652の言語
宗教	イスラム教が90%近い

資料：インドネシア・データ 大百科事典 平凡社

8. 死と生 戦争と平和 平成の森に戦争資料館と国立追悼施設を

2018年、平成最後の夏は私ども日本人としても様々な死と直面した時間でした。

自然の猛威が居住の弱点を突いた自然災害、西日本豪雨災害による多数の犠牲者、超高齢多死社会での友人たちの死、身近な人の病死、事故死、若い人の自殺、日常空間での理不尽な殺人事件、オウムの死刑執行、そして先の戦争での310万人の戦死、広島・長崎の非人道的な原爆による死。

マン・イズ・モータル (Man is mortal) 「人間は死を免れることはできない」とは、絶対の真理とはいえ、職場の同僚の死、弟子の死、情愛を交わした身内の者の死には深い悲しみを覚えます。8月のお盆は死者たちとの再会、会話の時です。人間社会の基底には死者への弔い、敬愛、尊崇の念があります。

先の戦争を体験した人達は皆高齢となり、戦争の非道、不毛さを訴え、平和の大切さを語っております。

地球にはいまだ紛争・戦争地域があります。北朝鮮の核を巡ってあわやの危機もありました。戦後73年、日本は戦争の反省、不戦の誓いと平和がテーマでした。

今年の夏は平成最後の夏になります。この節目の年に改めて日本の不戦の誓いと先の戦争で亡くなった方々を国家的に慰霊する「国立追悼施設」を政府として表明して、実現してほしいものです。この施設には、消えかけている戦争体験者の数々の証言、記録を集めた資料館を併設して、内外の参詣者、戦争を知らない日本の若い人たちの学習の場を提供してほしいものです。この計画を国際コンペにするのも一案です。これを平成年代を記念する「平成の^{カミ}森づくり」と一体的にする図を思い描いて過ごした、2018（平成30）年猛暑の夏でした。

. (2018.09.03)